

# 化生の本義について

## ——仏教における自然概念の一側面——

大 西 啓 一  
(大 阪 大 学)

### 0. はじめに

今日、我々日本人が「自然（しぜん）」と言えは、第一には「自然環境」の自然であり、第二に「そのまま・ありのまま」という意味での用法が主であるように感じられるが、本来は、言うまでも無く「自然（じねん）」という仏教漢訳用語から来ていることは周知のことである。

そして人間がこの大自然、大宇宙の中で、手を加えることの出来ない事柄の一つに生と死がある。自然界の営みの中で、最も根本的で、かつ最も壮大なものがこの生と死であろう。

無常偈の一句 uppāda-vaya-dhammino（生じては、分離消散する法則を持つもの達である）という言葉を待つまでも無く、自然界のあらゆるものが、生に始まり死に終わる、という大法則の中で連綿と存在してきている。

今回私は、とりわけ自然の神秘を感じさせる「生」の方に焦点を当て、その中でも特に Spontaneously produced と訳され、「自然に発生する」とされる誕生形態の「化生」について、同じく化生という誕生形態を記すジャイナ教文献と比較しつつ、気がついたことに検討考察を加えたい。

この化生については、今までにも研究されてきたが、<sup>(1)</sup>そこでは化生という意味と共に、「再び生まれる」という意味の想定が可能であろう、と述

べられている。私はそれらの研究を踏まえた上で、「化生」と「再び生まれる」という両者の意味の関係と、その用例についても調べてみた。

## 1. 化生について

化生とは何であるか、まず、共通に認識されている定義を確認しておきたい。代表的な化生の説明としては

「化生とは ①自然に生まれる ②自然発生の生きもの ③母胎・卵・水などのよりどころをもたずに忽然と生まれる生類のこと。」  
と、この様に説明される<sup>(2)</sup>。他にも大同小異はあろうが、恐らく簡要な説明として、これが最も一般的な認識とっていいだろう。

インド語原語として現れるのは、upapāduka, -ika または aupapāduka, -ika<sup>(3)</sup>(Skt.), 他に相当語として Prākṛt に opapātika (Pāli), uvavāia・ovavāia (AMg) などがある。この Skt. と Prākṛt の両語を比較してみると

Skt. → √ pad

Pāli → √ pat

と動詞語根が見て取れる。語形からは、Skt. の方は √ pad, Prākṛt の方は √ pat で、「化生」の語感、すなわち「化けて生じる・突発的に生じる」という感じが、√ pat (落ちる・飛ぶ) と結びつきそうに思えるのだが、本来の語根は √ pad (踏み出す)<sup>(4)</sup> であることが論証されているのは周知の通りである。<sup>(5)</sup>

それならば、仏典漢訳者が接したであろう Skt. 形かそれに近い形も √ pat に見えたとは考え難く、では、どうして upa + √ pad (次へ近づき到る) が「化生」と訳されたのか? という疑問が生じるのである。

## 2. 用例について

「化生」の現れる用例を見ていくと、それらが決して一様ではなく、おおよそ三種に分類できることが分かる。

### I 四生のうちの化生

### II 四沙門果の不還の形容語としての化生

### III 断滅論者の定形句中の化生

これらの各用例を紹介しながら、気付いた点を付して順次見ていくことにする。

### I 四生のうちの化生

四生とは「卵生・胎生・湿生・化生」の四つの誕生の仕方であるが、<sup>(6)</sup>ここでの代表的な用例を見てみよう。

#### ● Saṃyutta-nikāya

catasso imā bhikkhave nāgayoniyo// katamā catasso//  
aṇḍajā nāgā jarābujā nāgā saṃsedajā nāgā opapātikā nāgā//  
imā kho bhikkhave catasso nāgayoniyo ti // (SN III, p.240, 17-19.)  
比丘達よ、ナーガの出生には、これら四つがある。いずれの四つであるか？ 卵生のナーガ達、胎生のナーガ達、湿生のナーガ達、  
opapātika のナーガ達である。

よいか、比丘達よ、これら四つがナーガの出生である、と。

注釈はこの部分で opapātikā のことを ‘uppatitvā viya jāta’ と説明している。<sup>(7)</sup>そして、これとほぼ同内容の文が Majjhimanikāya にも見られる。

● Majjhimanikāya

catasso kho imā Sāriputta yoniyo, katamā catasso, aṇḍajā yoni, jalābujā yoni, saṃsedajā yoni, opapātikā yoni. (MN I, p.73, 3-4.)

よいか、サーリプッタよ、これら四つの出生がある。いずれの四つであるか？卵生の出生、胎生の出生、湿生の出生、opapātika の出生である。

ここでの注釈は ‘vinā etehi kāraṇehi uppatitvā viya nibbattā ti opapātikā.’<sup>(8)</sup> 「これらの原因（卵胎湿）以外で飛び出したように発生した者達，というのが opapātikā である。」とあり、この注釈の説明に依拠するならば、

○何らかのものに依存することを因として生じる→卵生・胎生・湿生

○卵胎湿（のような依存した形態）以外で生じる→化生

と、出生形態を二つに分けて考えていることが見て取れる。

また、卵・胎・湿生がその語尾に ja を持つのに対して、化生が ja ではなく ka を持つことへの直接の注釈はなく、opapātika と～ja に関係すると思われる表現に関しては、SN の注釈書 Sp II, p.348, 31-32に述べられる jātā という以外には、特に言及されていない。

一方、同じ様な誕生の分類を述べる箇所が、ジャイナ教の文献にもある。

● Āyāraṃga

sant’ime tasā pāṇā taṃ jahā : aṇḍayā poyayā jarāuyā rasayā saṃseyayā saṃmucchimā ubbhiyā uvavāiyā. (Āy. I, 1, 6, 1.)

これら動く生き物達があります。すなわち、卵から生じるもの達・裸の姿から生じるもの達・胎児の姿から生じるもの達・液体から生じるも

の達・湿気から生じるもの達・凝集するもの達・破り出ることによって生じるもの達・uvavāiya 達。

● Āy vṛtti<sup>(9)</sup>

upapātāj jātā upapātajāḥ, atha vā upapāte bhavā aupapātikāḥ devā nārakāś ca.

upapātaから生じた者達が upapātaja達であり、或いはまた、upapātaにおける存在、神々と地獄の住人達が aupapātika 達である。

ここで注目すべきことは、注釈者は化生者（ここでは uvavāiya）のことを ‘upapāta-ja’ と言い換えていることで、化生者という出生形態をも ja という語尾と考えていることである。

これは仏教の注釈類にはみられないもので、同時に述べられる他の生まれの表記、aṇḍaya や jarāyua などの語末 ya が、Skt. に直すと ja とされるため、整合性を持たせるためにこの様な解釈をしたものであろう。これについては、先の ka との関係を含めて、後ほど触れることにする。

そして又これらの点と共に、仏教の四生にせよ、ジャイナ教の八生にせよ、生まれが列挙される時には、必ず化生に相当する語が、列挙の最後尾に位置していることは、注意されて良いと思われる。

## II 四沙門果の不還の形容語としての化生

ここでは出生ではなく、むしろ死後の表現に属するものとして現れる。以下は不還果を得た者の説明に、定型表現としてよく知られた表現である。

pañcannaṃ orambhāgiyānaṃ saṃyojanānaṃ parikkhayā opapāti-  
ko hoti tattha parinibbāyī anāvatti-dhammo tasmā lokā.

(DN I, p.156, 20.)

五つの低位の諸結縛の滅尽の後、opapātika、そこで涅槃する者、その世から還って来ない決まりの者となる。

注釈はこの部分の opapātika を ‘sesa-yoni-paṭikkhepa-vacanam etaṃ’<sup>(10)</sup> (残りの出生を放棄する言葉がこれである)、パラレルの AN の注釈では ‘uppanna’<sup>(11)</sup> (生じた者) と説明する。

不還果における opapātika は四生の一つとして述べられるわけではないし、むしろ死後の表現なのであるが、死後に色界以上の天界に再生し、そこで最後身としての生を受けることを表しているのであるから、内容としては生天者に準ずるものがあり、天界への生まれ方との関わりを考慮するなら、広い意味で I の化生に分類できるのであろうし、死後の表現に属するものでありつつ、しかし出生の形態とも少なからず関係している点では、I と次の III の再生における化生との中間的な位置にあるものとも言えよう。

III 最後に再生における化生である。見えざるものや、死後の存在を認めない断滅論者の主張の中で、sattā opapātikā は存在しないと述べる箇所がある。

● Sāmaññaphala-sutta

natthi mahārāja dinnaṃ natthi yiṭṭhaṃ natthi hutaṃ, natthi sukaṭa-  
dukkatāṇaṃ kammānaṃ phalaṃ vipāko, natthi ayam loko, natthi  
paro loko, natthi mātā natthi pitā, natthi sattā opapātikā natthi  
loke samaṇa-brāhmaṇa sammaggatā sammā-paṭippannā ye imaṇ  
ca lokaṃ paraṇ ca lokaṃ sayaṃ abhiññā sacchikatvā pavedenti.

(DN I p.55, 15-21.)

大王よ、布施されたものは存在しない、(祭式で) 祀られたものは存在しない、(火へ) 献供されたものは存在しない、善悪業の果報は存在しない、この世は存在しない、他の世は存在しない、母は存在しない、父は存在しない、sattā opapātikā は存在しない、世の中で、この世と他の世を自ら知り、目で見した後、(人に) 知らしめるような、正しく歩み、正しく実践した沙門・婆羅門は存在しない。

いわゆる六師説中の Ajita Kesakambalin の説として知られているものであるが、同経中の Saṅjaya Belaṭṭhiputta の説も sattā opapātikā の有無についての見解を述べている。注釈は

N’atthi sattā opapātikā ti cavitvā uppajjanaka-sattā nāma n’atthi vadati. (Sv I, p.165, 123ff.)

N’atthi sattā opapātikā とは、移動して(没して)後、生じる sattā というものは存在しないと主張することである。

と述べ、opapātikā が「没して後、生じる」の部分に該当し、出生形態としての化生ではなくて、生まれ変わりについて述べている、と考えられていることが分かる。

さらにこの Ajita 説の中でも、特に死後の問題に焦点を当てて取り上げているのが Pāyāsi 経であり、その中では

natthi para-loko, natthi sattā opapātikā, natthi sukaṭa-dukkatānaṃ  
kammānaṃ phalaṃ vipāko ti.<sup>(13)</sup>

と三点の否定を主張する断滅論者の Pāyāsi と、それを肯定する長老 Kumārakassapa とが対論している。このことから、この記述の opapātika は死後再生への言及であることが明確に分かる。ただしこの記

述からは、IIの不還果の化生のように出生形態の特徴をも含意されているのかは、明らかではない。

またジャイナ教文献にも、断滅論者による *sattā opapātikā* に相当する表現への言及がある。

*patteyaṃ kaṣiṇe āyā je bālā je ya paṇḍiyā /*  
*santi peccā na te santi n'atthi satt'ovavāiyā //* (Sū. I. 1. 1.11.)  
アートマンは、個々に完結している。愚者達、そして賢者達がいるが、  
彼らは逝った後には存在しない。*satt'ovavāiyā* は存在しないのだ。<sup>(14)</sup>

この記述からも出生形態ではなく、死後の存在や生まれ変わりについて述べている「化生」という語が、少なくとも当時の思想界に存在したことが分かるのである。

### 3. 考 察

以上のことを考慮しつつ、化生について考えてみる。

聖典ではないが、化生について、その定義を最も簡要に説明しているものとして、俱舍論の一文がある。

*upapādukā yoniḥ katamā / ye sattvā avikalā ahinendriyāḥ sarvāṅ-*  
*gapratyaṅgopetāḥ sakṛd upajāyante. / ata eva upapādane sādhu-*  
*kāritvād upapādukā ity ucyate./ tad yathā devanārakāntarābhavi-*  
*kādayaḥ./* (AKBh, III, pp.118-119.)

*upapāduka* の発生とは、いずれであるか。生類が完全無欠の運動感



覚器官を持ち、全ての身体の部位と身体の小部分を具えて一度に生まれ変わることである。正にこれ故に、再生において、上手く行くことから upapādukā と云われる。すなわち、神と地獄の者と中有の者などである。

ここにおいても、おおよそ伝統的な解釈を踏襲した説明が述べられているのであるが、一つ注目すべきことは、「一度に生まれ変わる (sakṛd upajāyante)」という記述である。

これを「直ちに・突然に」と解することも可能であろうが、卵生・胎生・湿生のように、何か依存する場所を経て出生するのではなくて、生まれ出るのに一回しか要しない、という意味での「一度」と解するのが妥当ではなかろうか、と考えるのである。このことは注釈において

śuklaśoṇitādy anupādānena sakṛd upajātatvāt.<sup>(15)</sup>

精液や血液などの質料因なしに、一度に生じたから

と述べられていることから窺えよう。

このことは四生のところで述べた「化生は出生形態の列挙の最後に出てくる」ことと無関係ではなさそうである。卵・胎・湿などに依存せずに、一度で出生するので、ただ「次の状態に到った・生まれ変わった」としか表現の仕様がないう、と考えれば、出生形態の列挙として「卵生・胎生・湿生・・・と、それ以外のもの」と、最後に述べられていることに肯首できるのである。

そしてこの様に理解することによって、「化生」の原語のみが語尾に ka を持つことには、それ相当の意味があることが見て取れるのである。つまり、出生の形態という点での並びを考慮するならば、「化生」の原語には

upapāta-ja や、もしくは upapatti-ja の様な、～ja の語形が望まれるのであろうが、依存・経由する場所なしに、直接次の状態に到るのならば、～ja のように「～から生じた者」というような言い方ができず、ただ直接次の状態に到った「者」としか言えないので、語末が ka とされている、と考えられるのである。

これらの検討を踏まえた上で、仏教文献以外での次の様な記述も見てみることにする。

● Carakasamhitā

mātrjaś cāyam garbhaḥ pitrjaś cātmajaś ca sātmyajaś ca rasajaś  
ca/

asti ca khalu sattvam aupapādukam iti hovāca bhagavān  
ātreyaḥ // (CS. 3,3.)

またこの胎児は、母親から生じ、父親から生じ、アートマンから生じ、自分と共なるものから生じ、液体（滋味）から生じる。さらに aupapāduka なサットヴァが存在するのだ、と尊師アートレーヤは言われた。

胎児が発現する描写として、母や父やアートマン以下に依りつつ、そしてもう一つ、ただ次の状態へ到るもの、としか言えない sattva とが存在する、とこの偈文を読むならば、前述の Ajita 説との関連で、母・父と opapātika または aupapāduka の関係、そして仏教以外でも語尾の ja と ka は明確に区別されていたことをよく示していると思われる。

つまりこの様に考えるならば、それと関連して、Sāmaññaphala-sutta の ‘natthi mātā natthi pitā, natthi sattā opapātikā’ の句は、一塊の意味

ある配列であり、「母は存在しない、父は存在しない、（母や父に依存しないで一度で直接）次生に到る sattā（も）存在しない<sup>(17)</sup>」という意味であるとも考えられ、化生のような不可思議な存在はもちろんのこと、生命の誕生という神秘的な自然現象の、それがたとえ「母父によって子が成される」という目に見える現象でさえも肯定しない<sup>(18)</sup>、という徹底した虚無論者の主張の記述の可能性も考えられるのである<sup>(19)</sup>。

それが正しければ、その主張の類似性から Ajita と近似の断滅論者・唯物論者とされる前出の Pāyāsi は、他世や sattā opapātikā や業果といった肉眼で確認できないことを否定するのみの、幾分穏やかな主張であり、目に見えるものさえ否定する Ajita の徹底振りとは一線を画しているとも考えられる。

| Ajita の主張              | Pāyāsi の主張             |
|------------------------|------------------------|
| 布施・祭式・火への献供は存在しない      | ×                      |
| 善悪業の果報は存在しない           | 善悪業の果報は存在しない           |
| この世・他の世は存在しない          | 他の世は存在しない              |
| 母・父は存在しない              | ×                      |
| sattā opapātikā は存在しない | sattā opapātikā は存在しない |
| 此世・他世を知る正しい婆羅門は存在しない   | ×                      |

何れにせよ、「直接次生に到る存在」などというものは、化生でなくとも、唯物論者や虚無論者には到底認めがたい存在であったことだけは確かであろう。

さて、さらにこの問題を敷衍するなら、化生ではない用法にも以上の解釈が適用できる。

● Arthaśāstra

sa sattrinbhiḥ śpathapūrvam ekaikam amātyam upajāpayet-‘a-dhārmiko ’yaṃ rājā, sādhu dhārmikam anyam asya tatkulinam aparuddhaṃ kulyam ekapragrahaṃ sāmāntam ātavikam aupa-pādikaṃ vā pratipādayāmaḥ, sarveṣāṃ etad rocate, kathaṃ vā tava’ iti / (AŚ 1, 10, 3.)

彼（purohita）は先に宣誓した一人一人の大臣を、工作員（sattrin）達を使って扇動すべきである。「この王はダルマに適う者ではない。いいかね、他のダルマに適う者—不遇の（王の）——族の者、（王の）一族を束ねる者、近隣諸侯、林棲族、aupapādika——をそれ（＝王）に就かせようではないか。これはみんなの望みを叶えるのだ。君はどうかね」と。

この aupapādika が化生とは何ら関係ないことは文意より明らかであるが、しかし Apte の The Practical Sanskrit Dictionary の該当箇所にも ‘upstart (?)’ とあるように、その内容は明確ではない。テキストの校訂者 Kangle の参照した注釈によれば、aupapādika は ‘a person suddenly risen to power’ の意とされており、王家以外の身分から大王になった Candragupta のような人物を指すという。上村勝彦氏も「成り上がり者」<sup>(20)</sup> という訳であるが、その根拠については述べられていないため、明確ではない。<sup>(21)</sup>

ここで、化生での解釈「（依存することなく）直接次の状態に到る者」という意味を適用するならば、王の一族や諸侯、土地の実力者といった、

王位継承の有力者の立場を経ることなく、ダイレクトに王位に到る者、という意味とも考えられ、三者の現代語訳が適合しているのではないかと考えるのである。

#### 4. ま と め

化生の原語は、注釈や論書の解釈を援用しつつ用例を検討した結果、本来「(依存することなく) 直接次の状態へ到る」という意味で理解するのが妥当であると思われる。

この理解によるならば、本稿では仮に出生形態・不還・再生と三種類の「化生」に場合分けしたものの、意味の違いから三種類が存在するのではなく、実はこれら三つは同根であり、「直接次の状態へ到る」という語義に集約・還元できることが分かるのである。

この様に考えると、古来より一般的に理解されてきた「化生」の語義のうち、仏教語大辞典で挙げるところの三種の中の③が最も本来の意味に忠実な可能性が高く、①②はその説明的な派生語義であり、本来の「じねん自然」や Spontaneously とは直接の連絡がある言葉ではないと考えられる。

#### 《Abbreviation》

AiU : Aitareya-upaniṣad, in : P. Olivelle (ed.), *The Early Upaniṣad*, New York, 1998.

AiG : J. Wackernagel / A. Debrunner, *Altindisch Grammatik*, III Bde., Göttingen, 1896-1964.

AN : R. Morris / E. Hardy / M. Hunt (ed.), *The Aṅguttara-Nikāya*, 6 vols., London : PTS, 1885-1910.

AKBh: P. Pradhan (ed.), *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*

- (Tibetan Sanskrit Works Series Vol.VIII), Patna, 1967
- AC : R.P. Kangle(ed.), *The Kauṭīliya Arthaśāstra*, 3 parts, Bombay, 1960-1965.
- Ay : W. Schubring (ed.), *Ācārāṅga-sūtra*, AKM XII, Leipzig, 1910.
- Isibh : W. Schubring (ed.), *Isibhāsiyāṁ*, Alt- und Neu-Indische Studien ; 14, Hamburg, 1969.
- CPD : V. Trenckner (et.al.), *A Critical Pāli Dictionary*, Copenhagen, 1924—.
- CS : V.J. Trikamji(ed.), *The Carakasamhitā by Agniveśa*, Bombay, 1941.
- ChU : Chāndogya-upaniṣad, in : P. Olivelle (ed.), *The Early Upaniṣad*, New York, 1998.
- DN : T.W. Rhys Davids / J.E. Carpenter (ed.), *The Dīgha Nikāya*, 3 vols., London : PTS, 1890-1911.
- Ps : J.H. Woods / D. Kosambi / I.B.Horner (ed.), *Paṭaṇḍa-sūdanī*, 4 vols., London : PTS, 1977.
- MN : V. Trenckner / R. Chalmers (ed.), *Majjhima-Nikāya*, 3 vols., London : PTS, 1888-1899.
- Mp : M. Walleser / H. Kopp (ed.), *Manorathapūraṇī*, 5 vols., London : PTS, 1924-1956.
- SN : Mrs. Rhys Davids / M. L. Feer (ed.), *The Saṃyutta-Nikāya*, 6 vols., London : PTS, 1884-1904.
- Sp : F.L. Woodward (ed.), *Sārattha-ppakāsinī*, 3 vols., London : PTS, 1929-1937.
- SU : Sūyagaḍaṅga, in : W. B. Bollee, *Studien zum Sūyagaḍa*, Wiesbaden, 1977.
- Sv : T.W. Rhys Davids / J.E. Carpenter / W. Stede (ed.), *The Sumanḡalavilāsinī*, 3 vols., London, 1886-1932.

## 注

- (1) e.g. E. Windisch, *Buddha's Geburt und die Lehre von der Seelenwanderung*, 1908, pp.184-194  
 渡辺研二「“me āyā uvavāie”と“sattā opapādikā”再考」『印度学仏教学研究』第45巻第二号 pp.46-52.

- (2) 中村元『仏教語大辞典』東京書籍, 昭和50年 p.291 化生の項より抜粋。
- (3) 語尾に uka を持つものと ika のものの二つがあるが, 両者の意味上の違いは明確ではない。AiG II2, §194によれば, ika は Vṛddhi 化に伴い現れたり, aka の崩れた形であったりと, ika そのものに強い意味があるとは考えられていないようである。また§291の説明によっても, uka は基本的な語尾として説明されるのみで, 明確な区別化はされていない。ちなみに江島恵教(代表)『梵蔵漢法華経原典総索引』第III分冊, 佛乃世界社, 1987年, s.v. aupapāduka によれば, 写本によって uka・ika 両方の形が現れるといい, 語尾形の違いによる意味上の差異は, あまり考慮する必要はないのかもしれない。
- (4) CPD, s.v. upapāta, E.Leumann, *Das Aupapātika Sūtra* (AKM VIII), Leipzig, 1883, p.1.  
 また他にも, 同一テキストの内部で異同のあるものもある。  
 ● Tattvārthādhigamasūtra  
 白衣派の伝承では  
     vaikriyam aupapāṭikam.  
     [Mody Keshavlal Premchand(ed.), *Tattvārthādhigama by Umāsvāti*, Calcutta, 1904, 2.47]であるが,  
 これを空衣派の伝承では  
     aupapāḍikaṃ vaikriyam'  
     [Pandit A. Shantiraja Sastri (ed.), *The Tattvartha Sutra*, Mysore, 1944, 2.46.]とする。
- (5) 部派仏教においては中有などの問題の説明として, 都合上√pat を意識していた可能性までは否定しきれないが, その検討は本稿では割愛する。
- (6) ただし仏教以外では, このような数え方もある。  
     tesāṃ khalv eṣāṃ bhūtānāṃ triṇy eva bijāni bhavanty āṇḍajam jīvajam udbhijjam iti. (ChU. 6, 3, 1.) →三生  
     bijānitarāṇi cetarāṇi cāṇḍajāni ca jārujāni ca svedajāni codbhijāni. (AiU 3,3.) →四生
- (7) Sp II, p.348, 31-32.
- (8) Ps II, p.36, 6.
- (9) *Ācārāṅgasūtram and Sūtrakṛtāṅgasūtram* with the Niryukti of Ācārya Bhadrabāhu Svāmi and the Comentary of Silāṅkacārya, Delhi, 1978. p.47.
- (10) Sv I, p.313, 11.
- (11) Mp II, p349, 18.

(12) 大乘仏典においては仏国土に生まれる存在を aupapāduka と呼んでいる。

- Sukhāvativyūha [larger. F. Max Müller and Bunyiu Nanjo(ed.), Anecdota Oxoniensia Aryan Series, Vol. I -Part II, *Sukhāvativyūha*, Oxford, 1883.]

saṃti khalu punar atra bhagavan sattvā ya aupapādukāḥ padmeṣu paryamkaiḥ prādurbhavaṃti (41)

「尊師よ、ご存知のように、さらにそこには、蓮の中に結跏趺坐して出現する aupapāduka である生類達があります。」

- Saddharmapuṇḍarika sūtra [U. Wogihara & C. Tsuchida(ed.), *Saddharmapuṇḍarika-sūtram*, Tokyo, 1934-1935.]

tena khalu punar bhikṣavaḥ samayenedaṃ buddha-kṣetram apagata-pāpaṃ bhaviṣyati apagata-mātrgrāmaṃ ca sarve ca te sattvā aupapādukā bhaviṣyanti brahma-cāriṇo mano-mayair ātmabhāvaiḥ svayaṃ prabhā ....(VIII, p.178, 16-19.)

「いいかね比丘達よ、また同じ時期に、このブッダの土地は悪を離れたものであり、母となる群れ（女性）を離れたものとなるであろうし、また彼らすべての生類は aupapāduka 達であり、純潔の修行者達であり、思考から作られた自己存在によって、自ら光る者達・・・となるであろう。」

(13) DN II p.319, 12-14.

(14) 内容については cf. W. B. Bollée, *Studien zum Sāyagaḍa*, Wiesbaden, 1977, pp.64-65.

(15) U. Wogihara(ed.), *Abhidharmakośavyākhyā*, Tokyo, 1935, p.265, 13-14.

(16) この箇所については、Windisch, op.cit. p.193, 3ff. が詳しく論じている。

(17) M. Cone, *Dictionary of Pāli*, Oxford : PTS, 2001.においては、同様の解釈を思わせる ‘being reborn without parents’ の訳語を与えている。s.v. opapātika.

(18) 母父についての注釈は

tesu sammā-paṭipatti- micchā-paṭipattinaṃ phalābhāva-vasena vadati.  
(Sv p.165, 22-23.)

「彼ら（母父）に対する正しい実践、邪な実践の果報が存在しないことによって、主張する。」

この注釈の記述からは、親孝行・親不孝の報いはない、という意味であると考えられる。

(19) 高木純元「沙門果経にみられる六師外道と経作者の意図」『仏教学会報』第4・5号合併号, p6.において、Ajita 説と Isibh の Ukkala 説の相応が指摘



されているが、まさにその Ukkala 説は、虚無論とも言える一切の否定である。

● Isibhāsiyāṃ

se kiṃ taṃ savv'ukkale? savv'ukkale ṇāmaṃ je ṇaṃ savvato savva-saṃbhavābhāvā ṇo taccam, savvato savvahā savva-kālaṃ ca n'atthi'tti savva-cchedaṃ vadati. se taṃ savv'ukkale. (Isibh §20, 14-16.)

「その『すべての ukkala』とは何であるか？『すべての ukkala』と名付くもの、それは『あらゆる点で、あらゆる可能性は存在しないから、第三のものは無く、あらゆる点で、あらゆる様態、そしてあらゆる時の間、存在しない』と、すべての断滅を主張する。それがその『すべての ukkala』である。」

この様に一切を否定する宣言の後、Ajita や Pāyāsi と同様に、他世・死後の再生・業果の否定が述べられる。

(20) AŚ, part 2, p.19n.

(21) 上村勝彦『カウティリヤ実利論』（上）岩波書店 1984, p.45.

